

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 21 日現在

機関番号：12601
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2015
課題番号：25770003
研究課題名(和文) Understanding Perceptual Representation

研究課題名(英文) Understanding Perceptual Representation

研究代表者
オデイ ジョン(O'DEA, John)

東京大学・教養学部・准教授

研究者番号：50534377
交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：この研究では知覚表現の構造、中でも知覚体験の恒常性に焦点を当て、「知覚体験には対象自体が持つ特質を認識することとそれを体験する主体の特質を認識することの両方が含まれるのか」を探求した。また後者は知覚者を巻き込んだ関係性の特質(例えば、知覚者と対象との距離は客観的な特質だが、同時に知覚者との関係性を持っている)を認識することと異なるのかという点である。今回は色と明暗の知覚体験について、そしてそれに関連して照明の知覚に関する問題を多く扱い、色または明暗と照明とのつながりを知覚体験において理解するためには、多次元尺度構成法(MDS)を用いるのが有効だという発見があった。

研究成果の概要(英文)：This research focused on the structure of perceptual representation, particularly in the context of perceptual constancy. I particularly focussed on the question of whether perceptual experience includes awareness both of object features and also of subjective features of the experience, and if the latter are different from awareness of perceiver-involving relational features (features which are objective, such as distance from the perceiver, and yet by nature are perceiver-involving). Much of my research focussed particularly on the perception of colour and lightness, and in connection to these, the perception of illumination. I found that the link between colour/lightness and illumination in perception can be captured in some way through existing uses of multidimensional scaling.

研究分野：知覚の哲学

キーワード：Philosophy of perception

1. 研究開始当初の背景

知覚について知ることは、そもそも人間の存在について、すなわち人が意識を持つことについて理解するのに欠かせない課題である。しかしながら、カフカの名言にある「なぜ事象は私が見ているように見えるのか」という知覚研究の根本的な問いには未だ満足のいく答えが見つかってはいない。例えば、遠くにある物体が「小さく見える」というごく単純な現象についても、我々はその物体の大きさを正確に見ているにもかかわらず、それをうまく説明する手段を持ってはいない(知覚の恒常性)。この研究では、三つの現象(恒常性、様相、規範)を通して知覚の「表象構造」を探求する。

2. 研究の目的

知覚における恒常性とは、我々が様々な照明、その他の条件のもとで、対象物の持つ要素や特質を正確に知覚することができることを指す。しかしそれは同時に不可思議な、相反する面も持っている。例えば、遠くにある物体をその正しい大きさで知覚することができるが、同時にそれは別の意味で「小さく見えている」という現象学的事実としてしばしば捉えられている。この問題に取り組むにあたり、私は、物体が持つ双方の特質が、どちらも見る主体によって経験された特質であることに注目した。知覚の恒常性に共通の要素として、このような対象物が持つ異なる特質の間に関連性があると仮定して研究を展開した。さらに、知覚構造における重要な例として、それぞれの知覚の様相に違いがあるかという問題も扱うことを目的に入れた。

3. 研究の方法

当研究は哲学・現象学のプロジェクトとして三つの段階に分けて遂行した。

1) 視覚研究の哲学と科学において使われる「proximal (基幹部に近い)」様相という概念で示される知覚作用について明らかにした。

2) 知覚経験の恒常性について現象学的な解説を試みた。恒常性が出現する文脈は、色、形、大きさなどに代表されるように様々であり、それらは別々に研究されてきている。中でも、色は通常主体が経験するものとして分析されてきた。色とそれ以外の知覚の恒常性とは本当に違いがあるのか、そしてそれを主体という観点から見るのが適切なのか、を探求した。

3) 異なる知覚間の関連性を見るために inter-sensory の分野に焦点を当てた。その一例として、我々は対象物の形を見る際にも、実は色を見て判断しているという点に注目した。これは、複数の様相が自然に一つのものとして受け取られている例である。この研究を通して、知覚様相が自然なものとして受け取られるために必要なのは何かという問いが前景化した。

4. 研究成果

当研究の主な成果として、過去の研究の誤りを発見したことがあげられる。その共通の誤りは、知覚経験を単に二つの面からなる経験だと考えたことに由来している。デカルトを受け継いだ伝統的な、感覚/知覚という二分化 (Atherton, 2002)、それをより近代的に展開したノエ (2004) の視覚的/非視覚的という二分化、または、ケネディ (2007) が論

じた「見せ方」と知覚された要素との分割、そしてロック(1983)が提唱した知覚の遠近の「様相」の違い、などがその例である。これらの論は、知覚が単純な要素で構成されるという、知覚経験についての誤った仮説に依拠していると、私の研究では結論づけている。現象学的な観点からも、実証的にも、この仮説を否定することは妥当であり、また証明可能なことである。さらに、この仮説から脱することによって、これまで広く長期間にわたって哲学者を困惑させてきた問題、すなわち知覚の恒常性と関わって生じる「現象学的なヴァリエーション」についての様々な問題を明らかにすることが可能になる。

色の知覚に関する研究は特殊であり、色は独自の要素を持つものとして、他の知覚経験とは別に扱われることが多い。Mausfeld(2003)の論をもとに、私は、色は独自の知覚経験をもたらすのではなく、他の異なる知覚に関わっていると考えるに至った。それは、我々がイルミネーション・カラーとサーフィス・カラーの両方を同時に見ており、物体の大きさ、距離、形、向きなどと同じように違和感を持たずにそれを受けいれていることで証明できる立場である。対象物がある色を持っているように見えることと、照明によってある色を帯びているように見えることは同じでない。つまりイルミネーション・カラーとサーフィス・カラーはそれぞれ異なる要素を持つ色の空間を持っているのだ。その良い例として、灰色はイルミネーション・カラーとしては存在しない。それはグレイという名で呼びはするが、実際には白の薄暗い照明である。そして薄暗い白は灰色とは異なる特質を持ち、明らかに違うものとして我々の目にも映る。Mausfeldが論じているように、イルミネーション・カラーとサーフィス・カラーが類似した現象として知覚されるのは、「偶然」だと仮定してみよう。つまり、両者はまったく異なった道を通って知覚

の領域に入るが、その要素は現象学的に類似していると考えられるわけである。そうであれば、この二つが違和感を持って受け取られることはないのである。対象物の幅と高さについても似たようなことが言える。それらを知覚するとき、それぞれ異なる要素を持つにもかかわらず、我々は同一の圏内で測定するため、それは違和感をもたらさない。ただし、高さがゼロの場合は幅もゼロであるという制限がある。これはイルミネーション・カラーの視覚がゼロの場合に、サーフィス・カラーの視覚もゼロであることと同じだ。

しかしここで、物体の表面がある意味ではサーフィス・カラーとイルミネーション・カラーの両方を持っていることから、両者がどう関わりあっているかという問いが生まれる。色彩の科学的研究では、色は、色調と浸潤と明るさの三つの要素で成りたつと考えられている。それに従うと、イルミネーション・カラーは、四つ目の要素だということになる。このアプローチは、イルミネーションとサーフィスの複雑な関係性を可視化させるものとして、有効である。一例として、それぞれの空間の質が、このアプローチによって「共有される」ものか「独立した」ものを示すことが可能になる。共有される空間、例えば、色合いと浸潤と明るさの三つが混在する色の空間は、見る主体が心理的に統一させたことにより、共有される空間となる。そして現象学的には、色は単一の質を持つものとされているから、それはすぐに小さく分割される要素を持つとは考えられていない。これに対して、「独立した」質を持つ空間は、初めから異なる要素が内在していると定義された空間である。私は、この研究プロジェクトを終了した時点で、イルミネーションとサーフィスの色空間の関係性はこのどちらとも規定することができない空間であると結論づけている。このことは、知覚経験の恒常性について今後明らかにしていく際に、非

常に有益な発見だと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1 件)

O' Dea, John (印刷中): "Art and Ambiguity: A Gestalt-Shift Approach to Elusive Appearances". In Phenomenal Presence, edited by F. Macpherson, M. Nida-Rümelin & F. Dorsch, Oxford: Oxford University Press. 査読有

[学会発表](計 7 件)

2015年5月3日 ダグシュトル (ドイツ) O' Dea, John, "Do Shadows Make Surfaces Look Dark?" Dagstuhl Seminar, "The Message in the Shadow: noise or knowledge?"

2014年11月26日 東京大学(東京都目黒区) O' Dea, John "What is a Sense Modality? Replies to Objections". Tokyo Colloquium on Cognitive Philosophy.

2014年5月7日 東京大学(東京都目黒区) O' Dea, John "The Problem of Sound". Tokyo Colloquium on Cognitive Philosophy.

2014年3月24日 バーミンガム(英国) O' Dea, John. "Why, and in What Sense, Things Look Different in the Shade". Royal Institute of Philosophy Public Lecture, University of Birmingham.

2014年3月17日 グラスゴー(英国) O' Dea, John "Why, and in What Sense, Things Look Different in the Shade". Regular Department Seminar, University of Glasgow.

2014年3月10~11日 南京市(中国) O' Dea, John "Body, Mind, World", Liberal Arts Program Intensive Lecture Series, Nanjing University.

2013年10月26日 東京大学(東京都文京区) O' Dea, John "Quality Spaces and Perceptual Experience", The First Today Workshop on Philosophy of Perception.

[図書](計 0 件)

研究者番号：

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

<http://perception.tokyo>

6．研究組織

(1)研究代表者

オデイ ジョン（O' DEA, John）

東京大学・教養学部・准教授

研究者番号：50534377

(2)研究分担者

（ ）

研究者番号：

(3)連携研究者

（ ）